

16. 態度・地域差

608 テスト不安の研究〔I〕：梅本堯夫・○藤本正信（京都大学）

①目的 Sarason, S. B. らの方法にしたがって試験に対する不安について分析することを目的とする。

②手続 Sarason らの Test Anxiety Scale for Children を用いてテスト不安を測定し、同時に General Anxiety Scale for Children を用いて不安の統制を行い、京大NX知能検査9-15を用いて知能を統制する。更に教師による試験の成績と全教科の総合判定を5段階によって評価し、その結果と不安の関係について分析を試みる。

③条件 被験者：小学校5年生、中学3年生この被験者を二群に分け第一群には知能検査直前にTASC及びGASCを実施し、第二群には知能検査後に実施した。

609 集団構造と心的平衡について：柴野忠義（京都大学）

集団構造はどんなになっているか、という事を、tele の関係からソシオメトリーによって3つの次元にわけて分析した。この調査の結果から、個人の問題、集団の問題は如何様になっているか、という事の追究の為に、「心的平衡」という概念を導入し、それによって、個人と社会の問題の根本的なあり方はどんなものであるか、という事を探究する。そしてこれが心理学の原理である事を強調すると共に、先科学的にも、後科学的にも重要な概念である事を強調し設定する。我々は、この関係枠でもって、何らかの調査に対しても、前提的に迫らなければならぬ。そして心理学というものは、この概念によって常に考えられるものでなければならぬと思う。

610 自己の態度の比較的研究（そのⅡ）：星野命（国際基督教大学）

人が自己及び自己の行動を意識し、評価し、一定の構えでこれを認知するしかた、即ち自己態度の測定法として、第一報（第22回日本心理学会大会）で紹介した Manford Kuhn らの20答法（Twenty Statements Test）があるが、これを中・高校生に実施した結果を報告する。第1報では、1) 自己態度についての反応は、まず自己を社会的地位やグループに結びつけたものであること、2) この種の反応に続いて、その個人によってのみ知られる反応が出る、ことなどを簡易な手続で検証したが、今回は、これらの反応の出現順位や比率さらに内容が、年齢や一定のグループの成員であることと密接な関係があることを検討し、その結果から自己態度の構成要因・形成過程に言及する。

611 語認知に及ぼす情動効果（Ⅲ）：後藤与一（大阪学芸大学）

不安や恐怖は知覚防衛を、快や欲求は知覚促進を生ずることは既実証されてきた。しかし瞬間露出器による日本語単語についての検証は容易でない。単語の刺戟構造並びに熟知度の統制が困難であるからである。ここでは熟知価3.50-3.99の80個の3音節単語を使い恒常法によって認知閾測定を行い、4 session に亘り練習効果と疲労効果を3実験において確かめた。そして語刺戟の5秒前に脅威的情動句を与えた時、中性語句を与えた時に比し語認知が sess. 3において有意に高い閾値 ($t=2.863$, $df=9$, $.02 > P > .01$) を、性的写真が先行した時の語認知閾は中性のそれに比し suggestive に低い閾値を示した。脅威刺戟と性刺戟の語認知への効果は有意に反対であった。

612 農村青年の生活時間構成と集団活動：越河六郎（労働科学研究所）

集団活動を行なっている農村青年の生活時間構成が、その集団活動に費やされる時間によって、どの程度の影響を受けているかを明らかにした。1年間にわたる生活時間調査を水田単作地帯の農家の6世帯の青年たちに実施し、主として、集団活動時間と労働時間・睡眠時間との関係、家族員の生活時間構成への影響をみた。その結果、特に睡眠時間の短縮がいちじるしいことがわかった。これは集団活動が夜に多いということと、農村の生活時間構成においては、休養・教養娯楽の時間が夕食後に片寄っているという一般的傾向と関連している。睡眠時間の短縮は、さらに労働時間への影響となってあらわれ、生活時間全体に広がる。